

## 多文化な子どもへの支援 —高校入試へのサポートとは—

坪内好子（特定非営利活動法人多文化共生センター大阪）

### 1. 実践の場の特徴

当センターでは、国内で日本語指導を要する児童・生徒数（外国籍・日本国籍）が5番目に多い<sup>1)</sup>大阪で、在住外国人支援の一環として2005年より多文化な子どもへの学習支援教室「サタディクラス」、2013年より『TABUNKA SHINGAKU JUKU(以下「たぶんか塾」)』の事業を実施し、多文化な子どもの高校への進学サポートを行っている。

本発表ではこの中で特に2013年12月～2016年3月における「たぶんか塾」の実践から、高校入試へのサポートについて報告する。対象の子どもたちは中国、フィリピン、タイ、アメリカにルーツを持つ15歳～19歳の10名前後(各年)で、サポート開始時の滞日期間は約1か月～6年程度である。大阪市・大阪府・兵庫県から阪急十三駅近くの本センターの一室に通い学習した。

漢字圏・非漢字圏出身の子の日本語力の差と学習における経験、意欲、環境等の差が絡み合いながら個々の違いを表出している。また、日本の学校に在籍している子どもばかりではなく、母国で9年間の学業を終えて来日し、日本の学校には在籍していない子ども(以下「既卒生」)には教育委員会が行う資格審査等の書類準備の日本語サポートも必要である。子どもたちは、短期間に多くのことを体得する必要がある、適切なサポートの内容と方法が常に問われる課題である。

### 2. 実践の目標

多文化な子どもたちが、将来生きていく上で自己実現につながる高校への進路選択の可能性を発見すること、中退などの危機を乗り越える力を蓄積することを目標としている。

#### 2.1 身近な教材と指導

インターネット上や書籍で出回っている教材や大阪市帰国した子どもの教育センター校（以下「センター校」）作成教材等を参考に、「サタディクラス」等地域の子どものための学習支援教室で学んだ元学習者や外国語を習得した支援者が自己の経験を活かしたわかりやすい日本語と必要に応じて母語を使用して対応する。また、当センター開発教材も改良中である。

学校生活に即した学校独特の用語や習慣などを伝える。例：授業開始時の挨拶、「起立、礼」等。

#### 2.2 講師自身のエンパワメント

元学習者が、自己の経験を活かして後輩に役に立つ情報や対策を提供し達成感が持てるアルバイト体験の場とする。多文化な子どもが社会において弱者ではなく豊かな文化の担い手として近い将来に地に足をつけて活躍していく足がかりとする。

### 3. 具体的な実践の目標の内容とその過程

#### 3.1 年間指導計画

数学クラス・英語クラスは、前半は教科の日本語支援（基礎的学習用語の読みと意味理解）に

重点を置き学校や学習支援教室での学習内容に準じた内容とし、後半は学習用語に重点を置きながら高校受験の過去問に取り組む。日本語クラスは個々の状況に合わせた会話、漢字、文法事項、作文等を組み合わせた個別指導計画を立てる。

「たぶんか塾」の学習内容についての復習テスト、入塾当初と終了時のプレイスメントテスト結果の比較から課題を整理する。

### 3.2 指導体制

塾講師養成講座を経た元当事者、日本語指導有資格者、学校講師、元塾講師、大学生、大学院生等を講師陣とする。「センター校」の元担当教師が教室長として資料整理し、学習に関する情報はメーリングリストで共有する。

生徒の学習場所（「センター校」に通う、大阪市・大阪府内の子どものための学習支援教室で学習、大人のための日本語教室で学習、大人対象の日本語学校で学習）による学習内容に沿った指導を生徒二人に一人程度の少人数対応で行う。

### 3.3 母語支援

母語作文、母語での教科指導、保護者への母語コメント等を通して母語保持、母語での思考整理、保護者とのつながりを図る。言語対応は、中国語、英語、スペイン語、タイ語等である。

### 3.4 他団体・学校との連携

他の学習支援教室や「センター校」との情報交換により課題や教材情報の共有を図る。特に学校に在籍していない「既卒生」については、他教室とバランスをとりながら日本の学校制度・入試に関する用語・学校文化指導について情報共有する。

## 4. 結果と考察

少人数で学習語彙の説明をゆっくりとはっきりと行うことで理解が深まり、次第に進路に向けて意欲的になった結果主体的な進路選択ができた。月に1回程度の母語での学習日は学習内容以外の悩みを打ち明ける場ともなり、クラスで唯一外国人という状況で学校で話すことができない子、一般の塾で日本語が分からないからと断られた子もいたが、ほっとする心の安定が得られ、母語は異なるが悩みを共有する者同士の居場所へと広がっていった。

2013年度～2015年度の大阪府公立高校日本語指導が必要な生徒選抜生徒数の約9%が「たぶんか塾」で学習し、大学進学を目指している生徒の中には「たぶんか塾」の講師になりたいと意欲的な子もいる。

大阪市、大阪府、兵庫県のそれぞれの選抜試験の違い、さらに地域の学習支援教室・日本語教室間で高校へのサポート体制に差があり、子どものニーズに沿う指導支援のガイドブック作成が待たれる。

2013年12月より開始の大阪市塾代助成制度が実施され、この時期に合わせ、「たぶんか塾」を開講したが、大阪市内、兵庫県の子、大阪市内に在住しているが中学校に位置づいていない「既卒生」等には適用されないため経済的困難な家庭向け基金が必要となる。

また、「既卒生」は家と学習支援の場を往復するのみで友達ができにくく、年齢相当の母語の力と日本語を習得することが難しい。それぞれの子どもへの対応策を探ると同時に、社会に多文化な子どもの高校進学の実情を発信していくことが必須である。

注1) 日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査（平成26年度文部科学省）